

「-的」の語基制約

金囁泳*

〈要旨〉

日本の近代には新漢語が多く生まれたが、中でも道徳的・科学的のような、「-的」の使用が著しく、今日に至ってはその優れた造語力によってさらに使用範囲が拡大されている。ところが、このような「-的」には、特定の漢語名詞、大部分の形容動詞語幹を語基として許容しない語基制約がある。今までは、「-的」の用法の変遷を通時的に考察し「-的」の起源及び受容と意味機能に関して考察を行った。本稿では、先行研究を踏まえ、とりわけ一部形容動詞語幹を許容する「-的」の実際の用例をもって「-的」の語基制約に関して検証を行った。

その結果、「-的」は、形容動詞の中で、より名詞に近い形容動詞を語基として採用しやすいことが分かった。しかし、それは絶対的な基準ではない傾向であって、現代日本語の「-的」には、慣用的に形容動詞語幹をその語基として使う旧用法も共存していることが分かった。

論文分野：語彙論，品詞論

キーワード：的，語基制約，漢語接尾辞，形容動詞，擬形容動詞

1. はじめに

日本の近代には新漢語が多く生まれたが、中でも「道徳的・科学的・民主的」など、「-的」の使用が著しく、今日に至ってはその優れた造語力によってさらに使用範囲が拡大されている。本稿では、「-的」に関する先行研究を参考にしながら、「-的」の語構成、その中でも「-的」の語基制約に関して考察を行いたい。

まず、「-的」の語基は多様であるが、(1)のように、特定の漢語名詞と大部分の形容動詞語幹は語基として成立しないなど、「-的」の語基にはある制約がある(金囁泳2009:86)。

- (1)a. 静かな夜 / *静かの(な)夜
- b. 下手な人 / *下手的(な)人
- c. 愉快な話 / *愉快的(な)話

つまり、的の連結を原則として拒んでいるものに、いわゆる形容動詞語幹があって、立派的・寛大的・偏狭的など先行のことばと的との接合部の溝が深く、「-的」の語幹として制約がある(藤居信雄:1957)。

* 大阪大学大学院 博士課程, 日本語学

しかし、形容動詞語幹でありながらも「的」と結合し、「-的」を形成する語がないことはない。藤居(1957)は「平板」「可能」「自然」などの用例をあげ、接合部の割れ目がわりあい浅いことばもあると述べた。つまり、(1)のように、「-的」には形容動詞語幹を語基として拒む語基制約があるが、(2)のように一部の形容動詞語幹は語基として許容されることである。本稿では、このような「-的」の語基制約に関して考察するが、主に漢語形容動詞を中心に考察を行うことにする。

- (2)a. …其は自然的の成行なり、既に自由の風が階級を吹拂ふたる後は…「階級制と君子の道」久米邦武『太陽』明治28年2号
- b. …神秘的な『沈鐘』を書いたハウプトマンは千八百九十九年に自然的な『馭者ヘンセル』を書いてゐる…「文芸上の自然主義」島村抱月『近代評論集I』明治41年
- c. …之を自然的趨勢に一任し、之に干渉すべからず、同時に、積極事業は、國力を量り、妄に之に着手せざるを得策とす…「朝鮮問題」川崎三郎『太陽』明治28年7号
- d. …孝道も佛教に庇保されてけり。日本の風俗は國家の結合も家族の親睦も遙に支那より篤ければ、忠孝の行も自然的に篤し。「倫理の改良(一)」久米邦武『太陽』明治28年5号
- e. …前に掲げた六要素中の自然的といふこと、すなはち人間の巧偽に反して自然の醇樸に還るといふ傾向がやがて此の自然主義であると共に…「文芸上の自然主義」島村抱月『近代評論集I』明治41年

今までは、「-的」の用法の変遷を通時的に考察し「-的」の起源及び受容と意味機能¹⁾に関して考察を行い、簡単ではあるが「-的」の語基制約に関しても言及した(金2009)。今回は、先行研究を踏まえ、とりわけ一部形容動詞語幹を許容する「-的」の実際の用例をもって「-的」の語基制約に関してさらなる検証を行いたい。これによって、多くの辞書記述²⁾において形容動詞と言われている「-的」の、一般形容動詞と区別される特徴を確認できる可能性があると考ええる。

2. 先行研究と問題点の所存

前述したように、特定の漢語名詞、大部分の形容動詞語幹は「-的」の語基として成立しないなど、「-的」の語基にはある制約がある。このような「-的」の語基制約に関して、藤居(1957)は以下のような用例をあげ、「的」は慣用的に語基と結合する「無規則連結性」であると述べた。

- (3)a. 進歩的 *散歩的
b. 美的 *真的 *善的

しかし、藤居(1957:74)は《的を従えた名詞は、例外なくそのまま形容動詞の語幹になります。そんな

1) 本稿における「-的」の意味機能は、「-的」自体の意味だけでなく、句(文章)のコンテキストにおける意味も含む概念で、語義とは区別する

2) 『日本国語大辞典』第二版(2001)、『広辞苑』第六版(2008)等々

わけで同姓不婚というか、すでに形動の語幹であることばとの接合には溝ができるのです》と述べ、形容動詞語幹が「-的」の語基になりにくい理由が、「-的」がすでに形容動詞であるからだと説明した。さらに、遠藤織枝(1984:136)は、《名詞につけ加えて形容動詞を作るのが接尾語「的」の役割であるから、もともと形容動詞であるものに「的」をつける必要はない》と述べた。

しかし、4節で詳しく述べるが、本稿における語基制約に関する結論も結果的には「-的」の語基制約にはルールがないという藤居(1957)の論と大差はないが、その結論に辿り着くまでの過程とその前提において大きく異なる。それは、稿者は一部例外³⁾として言われている「自然」「健康」などが「-的」の語基として成立可能であった原因を考えるにおいて、発生期における「-的」が形容動詞であったかがまず問題になると思うからである。

- (4) 「-的」は、徐々に現代日本語における形容動詞のような用法に近づき、形容動詞の扱いをされるようになった。従って、「形容動詞語幹+的(自然的など)」の語構成が可能であったり、また、語基がその性格が非状態性の名詞らしいものである場合、「-的」は終止用法をもたない(堀口1992)など、「-的」は純粋な形容動詞ではなく、擬似形容動詞であるといえよう。 金(2009:89)

つまり、明治期における「-的」の用法の変遷を考慮すると、「-的」が形容動詞のような役割を果たすようになったのは結果論的な話であって、発生期における「-的」は形容動詞として想定して使用され始めたのではないことが分かる(金2009:86)。

一方、高橋勝忠(2005)は、とりわけ形容動詞が「-的」の語基になりにくい理由を、以下(5)のような形容動詞と名詞を区別する基準に従い、(6)のように分析した。

- (5)a. 連体形が「-ナ」になる場合は形容動詞で、「-ノ」になる場合は名詞。
 b. 形容動詞は一般に名詞化接尾詞「サ」をつけることができるが、名詞はそうではない。
 c. 形容動詞は一般に推量的様態の「ソウダ」が付き得るが、名詞はそうではない。
- (6)a. 形容詞の機能のみ有する形容動詞は連体助詞の「な」が語レベルの「的」の前で形態的に見える。… 中略 … 形容動詞に語レベルの「的」が添加する場合、例えば「*簡單的」は「*簡単な」と形態的に「な」が見えるようになり、統語部門の連体助詞(屈折語尾)の「な」が語彙部門の中で姿を見せる結果、統語的要素の排除という形態的緊密性に抵触し、「*簡單的」が許されないということである。
 b. 「的」表現において心理的に見えてくる環境は次の2つの場合である。
 1) 語レベルにおいて：「的」の前に形容詞の用法のみ有する形容動詞(形容名詞)がくる場合(e.g. *簡單的, *複雑的)
 2) S構造複合語：「的」の後ろに和語が来る場合(e.g. *古典的本)
 c. 「的」表現において心理的に見えてこない環境は次の2つの場合である。
 1) 語レベルにおいて：「的」の前に名詞がくる場合(e.g. 機械的, 健康的)
 2) S構造複合語：「的」の後ろに漢語が来る場合(e.g. 古典的書(物)) (高橋2005:13)

3) いわゆる形容動詞の語幹には的はつきにくい。現代語での的のつきうる形容動詞の語幹は、通俗・永久・変則・経済・健康・神秘・自然・正常・正統などの諸語の範囲に限られるようだ。(山田1961:247)

しかし、ここで先決されなければならない点は、上記(6)のように、形容動詞の後部に「ナ」が心理的に見えるかどうかという、心理的・認知的な要因における考慮ではなく、まず何を形容動詞として認識しているのかという点である。さらに、実際の用例を調べた結果、形容動詞という品詞を認めるかどうかは別として、以下(7)のように、「簡単・複雑+ノ」という、「名詞+ノ」に近い形式が成立する以上、両語が形容動詞の用法のみ有する語であるとは言いにくい。よって、(6a・b)の記述はより詳しい検証が必要とされる。

- (7)a. 山岸主税申しますには、おおよそ簡単の隠語の種本は、いろは四十八文字にござりますようで、それを上より数えたり、又…「仇討姉妹笠」国枝史郎、1936『青空文庫』
- b. …削減は宗教・民族次元の信条や慣行によって複雑の度を加える。この制約は日本よりはアメリカ…「地球憲法第九条」國弘正雄、2001『現代日本語書き言葉均衡コーパス』
- c. しかしこれは在来の叙述を一步複雑の方面へ進めたものに過ぎません。「作家の態度」夏目漱石、1908『青空文庫』
- d. ニイチェほどに、矛盾を多分に有した複雑の思想家はなく、ニイチェほどに、残忍辛辣のメスをふるつて…「ニイチェに就いての雑感」萩原朔太郎、1972『青空文庫』

本稿では、このような「-的」における語基制約に関する先行研究を、具体的な用例をもって検証するが、その詳しい調査対象は以下のようなものである。

2.1 調査対象

- (8)a. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』「BCCWJ領域内公開データ(2009年度版のモニター公開データ)」：書籍(約3,000万語)・白書(約480万語)・Yahoo!知恵袋(約520万語)・国会会議録(約490万語)。
- b. 青空文庫：2009年7月13日までのテキスト。
- c. 名大会話コーパス⁴⁾：2名から4名の話者による約100時間の雑談を収録、文字化したデータ(会話参加者は女性161名、男性37名)・2,318,134語(約230万語)。

また、(8)に加えて金(2009)で使用した、明治期の合計310件(翻訳書84件・非翻訳書226件)のテキストにおける「-的」の用例も調査対象とした(テキスト目録は、金(2009)参照)。

3. 形容動詞

前述したように、「-的」には、ほとんどの形容動詞語幹を語基として持たないという、語基制約がある。これからはこの「-的」の語基制約に関して詳しく述べることにするが、その前にまず、形容動

4) 参加者は、日本語用例・コロケーション抽出システム『茶漉』のウェブページ参照 <http://tell.fll.purdue.edu/chakoshi/meidai-chuui.htm>

詞という品詞の定義に関して述べてから論を進めたいと思う。

形容動詞は形態的には名詞に近く、意味的には形容詞に近いと言われているが(上原聡2003)、形容動詞を品詞として認めるかどうかに関しては、今まで様々な議論が行われてきた。その中で、時枝文法では「シズカ・親切・元気」のような語はすべて名詞とみて、これらを独立した品詞として認めない立場をとっている。

一方、三尾砂以来これらの語を「ナ形容詞」と呼び、「サムイ・大キイ」などを「イ形容詞」と呼んで形容詞の下位類とみる立場であるが、三上文法も同様である(寺村秀夫(1982:53 - 54))。立場によって定義や用語は変わるが、本稿ではこのような名詞や形容詞と区別される一連の語を形容動詞と呼ぶことにする。

ところが、この形容動詞を名詞や形容詞と区別させる基準に関しては先行研究によって多数提案されてきたが、まず寺村(1982)は以下の三つのテストを行い、その中で(9a)と(9c)を通して名詞と形容動詞を仕分けると述べた。その結果として(10)のような用例をあげた。

- (9)a. コレ/ソレハ ____ダ
 b. ____が/ヲ/ニ/デ/ト/カラ…
 c. □ノ名詞 → □は名詞
 □ナ名詞 → □は形容動詞

- (10)名詞：病気, 本当, 真実, 嘘, 虚偽(ノ陳述), 無名(ノ詩人)
 形容動詞：元気, 達者, 確力, 確実, 親切, 有名(ナ詩人)

寺村(1982:66 - 71)

また、同氏はこれによって仕分けられた語は以下のような特徴を見せると述べた。

- (11) a. 形容動詞と判断された語は、「モット~」という比較の表現が可能で、名詞も時に可能な語があるが、形容動詞より自然ではない。
 b. 形容動詞は、名詞化接尾辞「サ」をつけることができるが、名詞はそうではない。
 c. 形容動詞は一般に 推量的様態の「ソウダ」が付き得る、名詞はそうではない。 寺村(1982)

一方、上原(2003)は、形態的な特徴から以下のように、三つの品詞を比較した。

- | | | |
|-------------|-----------------------|----------------------------------|
| (12) | 叙述機能 | 修飾機能 |
| a. 名詞(学生) | (彼は)学生 <u>だ</u> 。 | 学生 <u>の</u> (街) |
| b. 形容動詞(静か) | (彼は)静か <u>だ</u> 。 | 静か <u>な</u> (街) |
| c. 形容詞(いい) | (彼は)いい [<u>*だ</u>]。 | いい [<u>*の</u> / <u>*な</u>] (街) |

※ ただし、波線は稿者による。上原(2003:52 - 53)

4. 「-的」の語基制約

前節では先行研究における形容動詞の名詞と形容詞と区別される基準に関して言及したが、この形容動詞の語幹は「-的」の語基として拒まれると、多数の先行研究によって指摘された。本節では具体的な用例をもって、「-的」の語基と形容動詞語幹との関係を考察し、先行研究の記述における検証を行いたい。

4.1 「-的」の品詞

2節で言及したように、藤居(1957)を始めとする多くの先行研究は、「-的」は元々形容動詞であるゆえに、形容動詞の語幹にあえて「的」を付して形容動詞を構成する必要がないという。つまり、これには「-的」の品詞が形容動詞であるという前提が設けられていることが確認できる。

しかし、金(2009)で述べたように、「-的」という語は、発生期から形容動詞であったというより、その使用の拡大につれ、少しずつ形容動詞のような用法が多数になり、形容動詞のように認識されるようになっていったと見た方が適切である。それに関して、詳しくは以下のようなものである。

明治期全般のテキストにおける「-的」の用法の変遷を中心に分析し、「-的」がいかなる過程を経て日本語化されたかに関して考察してみると、まず、語幹連体用法(A的B)と、「-ナ(ル)」連体用法(A的ナ(ル)B)の増加が目立つ。つまり、連体修飾における文法標示であった「-的+ノ」の用法(13a)が減少し、新たな「-的+ナ」の用法(13c)が増加(「-的+ナル」の用法(13b)の減少を含め)したのである(金2009)。

- (13)a. 此豫言的ノ論説ハ少シク議會ヲ感動セシカドモ… 『仏国革命史・3巻』 明治9年(1876)20頁
 b. 己ヨリモ才能モ勝レ、事務ニモ熟シタル者アリテ、其議論ノ公正ナルニ感發シ、次第に其見識ヲ高尚ナラシメ… 『代議政體』 明治8年(1875)142頁
 c. わたしはまるで感情的な人間ではないんですからね。 『二十世紀』 明治44年(1911)378頁
 (金2009)

表1 明治期における「-的」の「連体用法」

用法 時代	延べ語数						%					
	㊦ ナ (ル)	㊧ ノ	㊨ 語幹	㊩ 助動 詞	その他	計	㊦ ナ (ル)	㊧ ノ	㊨ 語 幹	㊩ 助動 詞	その他	計
①明治 元-9	1	16	1	0	0	18	6	89	6	0	0	100
②明治 10-19	3	11	4	0	0	18	17	61	22	0	0	100
③明治 20-29	11	199	583	9	0	802	1	25	73	1	0	100
④明治 30-39	27	21	441	2	0	491	5	4	90	0	0	100
⑤明治 40-5	55	41	314	7	0	417	13	10	75	2	0	100
計	97	288	1343	18	0	1746	6	16	77	1	0	100

凡例 i) 「%」の場合、四捨五入で、実計が100でない場合もある。 ii) ㊩は明治40～大正5年。
 iii) 詳しいデータは、金(2009)参照。

また、表1のように、比較的早い時期には(14a・b・c)のような、形容動詞として例外的な用例が多数確認できる。また、比較的遅い時期においても(14d)のように、「ニ」を伴わずに直接連用修飾をする「-的」用例も確認できる。

- (14) a. 只ダ見ル前崖樹木ノ鬱葱タル處ヨリ、一個ノ惡鬼的一個ノ猛士的ト現出スルヲ。
 ※「惡鬼的」と「猛士的」の両用例は、一見被連体修飾語「人」が省略された用法だと考えられやすい。しかし、同頁の挿絵をみても「的」が名詞のように「人」という意味・用法を果たす用法であって、残存用法であると判断できる。『泰西活劇春窓綺話』明治11年(1878)489頁
- b. 而シテ社會ニ特別ノ負擔ヲ課スルノ必要ナルニ當テハ可成的之ヲ平等ナラシメ以テ政治上ノ理由ヨリ看テモ苛虐ト爲ス可カラサルガ如キ方法ニ… 『政府権限論』明治17年(1884)
- c. 商人等ハ革命政府ヲ以テ唯暫時的ト見做テ其永續スベキヲ疑ヒケレバ。
 『仏国革命史・3巻』明治9年(1876)31頁
- d. そうして遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。
 『こころ』大正3年(1914)

以上のことから、厳密にいつて「-的」は、純粋な形容動詞ではなく、時期が下るにつれ「形容動詞⁵⁾」に近づいた、擬似形容動詞であると見た方が適切であろう。

つまり、多くの形容動詞の語幹が「-的」の語幹として成立しなくなったのは、「-的」がその用法の変遷によって擬似形容動詞に変化していったからである。また、例外として見られる用例(自然的・健康的などは、比較的早い時期から存在していた慣用的な用法であると考えられるが、これに関しては、次節でさらに詳しく述べることにする。

4.2 「-的」の語基と形容動詞語幹

前述したように、多くの先行研究は「-的」の語基制約を「-的」がすでに形容動詞であることを前提において説明したが、高橋(2005)は形容動詞語幹に「ナ」が心理的に見えるので、後部に「的(ナ)」が付されかたいという理由をあげて説明した。

しかし、2節で述べたように、まず(6b-1)の《形容詞の用法のみ有する形容動詞：*単一的・*複雜的(高橋2005)》という記述には、(7)のような反例がある。言いかえると、(6)の記述の前提になる(5a)のように、連体形が「-ナ」になる場合は形容動詞で、「-ノ」になる場合は名詞であれば、「簡単」「複雜」のようないわゆる《形容詞の用法のみ有する形容動詞》は、名詞の用法である「簡単ノ」「複雜ノ」という用法が成立してはいけないのである。

さらに、もし(6b-1)の記述が有効であれば、これは、先に言及した、(9a)寺村(1982)と(12)上原(2003)の記述と背馳することになる。それは、用例としてあげられた「簡単」「複雜」が、形容詞の用法のみ有する形容動詞であれば、(9a)と(12)のように「簡単ダ」「複雜ダ」という用法が成立してはいけないからである。しかし、(15)のように、実際の用例をみると多数の用例があり、その記述には矛盾があることが確認できる。

5) 但し、ここでの「形容動詞」は、「語幹+的+(ナ)」のような形式の連体修飾用法を持つ語に限定する

- (15)a. ガラスのような『物体』に影響を与えるのは、バットや手で殴るなど、同じく『物体』によるのが一番簡単だ。「天国に涙はいらない」佐藤ケイ, 2001『現代日本語書き言葉均衡コーパス』
 b. 然し問題はもっと複雑だった。「工場細胞」小林多喜二, 1930『青空文庫』

ちなみに、この矛盾は、影山太郎(1993:368)⁶⁾も述べたように、形容動詞における「ダ」を、名詞における助動詞「ダ」と同じ助詞としてみるべきか否かという問題と関係する。まず、形容動詞を認めない立場としては、(12a・b)における「ダ」を同じ助動詞としてみるのは言うまでもないが、寺村(1982:69)も《「ノ」も「ナ」も、「ダ」の連体形とは考えず、(体言)助詞とする》と述べた。ところが、影山(1993:368-370)は、形容動詞に続く「ダ、デ、ニ」は語彙的屈折接尾辞であって、削除することができないが、名詞に続く「ダ、デ、ニ」は句であって削除できる統語部門であると述べた。

- (16)a. 兄は大学卒(で)、弟は高校卒だ。
 b. 兄は穏やか*(で)、弟は活発だ。
 c. 兄は強*(く)、弟は弱い。 影山(1993:369)
 (17)a. 兄は看護婦(の)、弟はOLの美しい女性と結婚した。
 b. 兄は穏やか*(な)、弟は活発な女性が理想だ。
 c. 兄は美し*(い)、弟は大人しい女性が理想だ。※ ただし、(17c)は稿者による。

影山(1993:369)

つまり、(16)のように、形容動詞に続く連体形(12の修飾機能・17b)の「-ナ」は、名詞の連体形「-ノ」(12の修飾機能・17a)とは違って、形容詞に続く「-イ、-ク」(12の修飾機能・17c)と対等である。よって、形容動詞の連体形「-ナ」は省略できない語彙部門になるということである。

一方、高橋(2005)はまず、前述した藤居(1957)と遠藤(1984)と同じく、すでに形容動詞である語にさらに「的」を付して形容動詞化する理由がないという論に従っている。また、《形容名詞の「な」は統語的要素として分析する。ただし、二字漢語ではないナ形容名詞(e.g. 穏やか)の「な」は語彙的要素として考える》と述べ、二字漢語でない形容動詞の場合、影山(1993)の論と意見を共にした。しかし、二字漢語の形容動詞の場合、形容動詞の語幹には語彙的屈折接尾辞「ナ」が心理的・認知的な感覚作用にたよって見えるので、「-的」を付すると「(二字漢語の)形容動詞語幹+ナ+的(ナ)」になり、結果的に「-的」の語基制約が起こると述べた。

しかし、まず(16b・17b)の場合、口語の場合は言うまでもなく、以下(18)の用例のように、二字漢語でない形容動詞でありながらも成立しないとは言い切れない。

- (18)a. なんといっても瀬戸内海は波もなく穏やか、しかも島また島で景色が良いからクルーズの満足感が得られる。

「船旅を楽しむ本」柳原良平, 1987『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

6) 独立した品詞として形容名詞(形容動詞)を認定するか否かは伝統的国語学者の間で意見が二分される。その混乱の主なる原因は「だ」の扱いにある

b. 眼光は鋭いが表情は穏やか、動作はゆっくりだが、威厳に満ちている。

「スリランカ巨大仏の不思議」楠元香代子, 2004『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

c. 丘間に一小湾をなし、水深く波穏やか、吾妻浜の奇巖、弁天嶋、行合岬など一とほり海岸の名勝がそろつてゐる。
「津軽」太宰治, 1944『青空文庫』

以上のことから、稿者は「-的」の語基制約を考察するに際して、心理的・認知的な感覚作用より、通時的な観点からの接近が必要とされると考える。まず、高橋(2005)が形容動詞を仕分ける基準として採用した(5)の三つの条件には揺れがあるからである。

(19)a. 名詞：男まさりのな性格

b. 形容詞：大きな/な小さな問題 大きい/な小さい問題 影山(1993:368)

(20)a. 懸命な/なの努力 色々な/なの行事 わずかな/なのお金

同様な/なのこと 多大な/なの損害

b. 動詞的なもの (橋本進吉1948:164)

その用法が限定された特集な語である (時枝誠記1950:116)

上原(2003:55)

影山(1993:368)はこれを、形容動詞と名詞の素性の値が微妙に変動したか、切り替わったからだと分析したが、(20)をみると、形容動詞と名詞における「ナ・ノ」の使用には、個人における認識差や歴史的な背景も作用していると考えられる。これに関して、寺村(1982:72)は《N, Na, A⁷》を一応別の品詞として立てることが、文法の記述を容易にするのであるが、この観察で同時に明らかになったことは、Nの中にもNa寄りものがあること、Naの中にも、よりNに近いものと、よりAに近いものがある》と述べた。よって、(6b-1)の《形容詞の用法のみ有する形容動詞》という記述に関しては以下のような疑問がある。

まず、(6b-1)に取り上げられた、「簡単」と「複雑」の場合、実際には(7)のような反例⁹⁾がある。また、形容動詞の語幹における「ナ・ノ」の選択には、(20)のように、個人差があつて、一概に言いにくいこと。

さらに、先行研究における形容動詞語幹を語基とする「-的」は以下(21)のようであるが、「平板・永久・破廉恥」などの場合、(5)における三つの条件をクリアした形容詞の用法のみ有する形容動詞だと思われる語である。しかし、今回の調査対象における用例を検討した結果、実際には以下の括弧の数値のように「-的」の語基として使われていることが分かる。

(21)a. 藤居(1957)：平板的(1+2+0例)、自然的(239+503+0例)、可能的(18+50+0例)

b. 山田巖(1961)

1) 現代語：通俗的(36+133+0)、永久的(65+93+0)、変則的(31+5+0)、経済的(2552+623+0)、健康的(145+27+1)、神秘的(249+297+3)、自然的(239+503+0)、正常的(0+3+0)、正統的(36+

7) 寺村(1982)の記述における、「N, Na, A」は、順番に「名詞(N), 形容動詞(Na), 形容詞(A)」である

8) 本稿の調査対象(8)において、単純的是例複雑的は22例がある(脚参照)

20+0)

2) 明治前期：不便的(0+0+0), 未曾有的(0+0+0), 緊要的(0+0+0), 絶大的(0+0+0), 頑固的(0+0+0), 破廉恥的(1+2+0)

c. 高橋(2005)：自然的(239+503+0), 健康的(145+27+1), 平和的(303+55+0)

d. 金(2009)：明治期テキスト(明治元年~大正5年)中, 一部

公正的(0+0+0), 合法的(150+65+0), 有名的(0+0+0), 微々の(0+0+0), 徐々の(0+0+0), 無形的(0+5+0), 有形的(0+6+0), 天然的(0+3+0), 平凡的(0+1+0), 悲哀的(1+0+0), 実用的(134+59+2), 卑近的(0+0+0), 知巧的(0+0+0)等々

※ 括弧の数值は、順番に今回の調査対象(8a・b・c)における用例数であって、稿者による。

つまり、名詞・形容動詞・形容詞という品詞の間には連続性があって、例えば、「簡単・複雑・親切」などの語はきわめて形容詞に近い形容動詞であるとは言えるが、それが形容詞の用法のみを持つ語であると言えるかはまた別の問題である。さらに、形容動詞を名詞と区別する基準として提案された(5a)の連体修飾における「-的+ナ」用法であるが、金(2009)で述べたように、発生期における「-的」連体修飾の主な用法は「-的+ノ」であった。しかし、「-的+ナ」連体修飾は、明治30年になってからようやく「-的+ノ」連体修飾を少し上回ることができたのである(金2009:88-表1)参照)。さらに、(21)の「不便的・未曾有的・緊要的・絶大的・頑固的」のように、今はあまり使われてない、死語化された用法がある一方、(21)の「正常的・破廉恥的・平凡的」のように未だに生命力を持つ語もある。

また、「-的」は近世、中国俗語文学(白話小説など)における翻訳・訓読によって導入され、明治期に西洋文献の翻訳語に多く使われて広まった、いわば二回にわたって翻訳の影響を受けた語である(金2009)。よって、ほとんど対等な位相を持つ語であっても慣用的に使われた語だけが残るなど、その成立を考えるには通時的な観点が必要とされるのである⁹⁾。もちろん、可能な限り明瞭な基準で多くの語を分類できる基準である点では、高橋(2005)における(6)の記述は、かなり有効であると考えられる。しかし、前述したように、「-的」の語基制約には例外が多く、その語形成においても規則性がない。それに、高橋(2005)における最も大きな根拠として示された影山(1993)の論も、前述したように再考の余地があると考えられる。

よって、「-的」の語基制約には、慣用的な用法におけるものと、後に付加された形容動詞用法の成長による形容動詞語幹を拒む性質が、共存していると考えた方が適切である。もちろん、(22)のように、後で発生した形容動詞のような用法(e.g.)「-的+ナ」連体修飾用法)の数が多く、それに圧倒されて主な用法とされ、形容動詞語幹が「-的」の語基として拒まれるようになったことはあると思われる。

(22)a. 翻訳書における「形容動詞語幹+的」の用例

1) 明治元年~19年：36例中9例 → 25%

2) 明治40年~大正5年：34例中0例 → 0%

b. 「-的」の連体用法の変化

「-的+な(る)」と「-的+被修飾語」の用法は、明治30年代になると「-的+の」用法を上回

9) (3)的(177+245+0)的(0+0+0)的(0+0+0) / (6b-1)簡的(0+5+0)複的(2+20+0) cf.)親的(0+0+0)

※ 括弧の数值は順番に調査対象(8a・b・c)における用例数であって、稿者による

る。また、明治40年代になると、「-的+な」は「-的+なる」用法を上回って、現代日本語における「-的」の用法に近づいていく。金(2009)

ところが、発生期から「-的」の語構成における性質の根底には、前述したように、中国俗語文学(白話小説など)と西洋文献の翻訳語としての特殊性が存在する点を忘れてはいけない。このような「-的」の語構成における特殊性は、後になって現代日本語における新しい「-的」の用法を招くことになると思うが、これに関しては今後の課題としたい。

5. おわりに

以上、本稿では、先行研究を踏まえ、多様な日本語コーパスにおける「-的」の用例を実証的に検討して、「-的」の語基制約に関する考察を行った。

先行研究によると、名詞と形容動詞は、1)連体形「ナ・ノ」、2)後に「ソウダ」が付けられるか、3)格助詞「ガ・ヲ・カラ」などとの共起、4)後に「サ」が付けられるか、5)前に「不」が付けられるか等々、多様な基準によって仕分けられる。ところが、形容動詞は、このような基準にどのくらい合致するかによって、より名詞に近い形容動詞になるか、より形容詞に近い形容動詞になるかが決まる。

その中で「-的」は、形容動詞の中で、より名詞に近い形容動詞を語基として採用しやすいと考えられる。しかし、それは絶対的な基準ではない傾向であって、現代日本語の「-的」には、慣用的に形容動詞語幹をその語基として使う旧用法も共存していることが分かった。

【参考文献】

- 上原聡(2003)「何故プロトタイプ構造か：日本語の「形容動詞」に見るプロトタイプ構造形成の歴史的考察」『認知言語学論考』ひつじ書房, pp.51-91
- 遠藤織枝(1984)「接尾語『的』の意味と用法」『日本語教育』53号, 日本語教育学会, pp.125-138
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 金驥泳(2009)「『-的』の日本語化」『2009年度春季大会予稿集』日本語学会, 於武庫川女子大学, pp.85-92
- 国立国語研究所(2009)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』「BCCWJ領域内公開データ(2009年度版のモニター公開データ)」
- 新村出(2008)『広辞苑』第六版, 岩波書店
- 高橋勝忠(2005)「『的』論考」『英文学論叢』49号, 京都女子大学英文学会, pp.1-22
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語編』岩波書店
- 日本国語大辞典編集委員会編(2001)『日本国語大辞典』第二版, 小学館
- 橋本進吉(1948)『国語法研究』岩波書店
- 藤居信雄(1957)「『的』という言葉」『言語生活』71号, 筑摩書房, pp.71-76

山田巖(1961)「発生期における的ということば」『言語生活』120, 筑摩書房, pp.56-61

青空文庫(2009) <http://www.aozora.gr.jp>

『茶漉』http://tell.fll.purdue.edu/chakoshi_wiki/

『ひまわり』<http://www.kokken.go.jp/lrc/index.php> (全文検索システム『ひまわり』)

〈요지〉

「-的」의 어기제약(語基制約)

근대 일본어에는 다수의 새로운 한자어가 출현했는데, 그 중에도 도덕적(道德的)·과학적(科學的) 등과 같은 「-的」의 사용이 두드러진다. 「-的」는 오늘날에 이르러서도 우수한 조어력에 힘입어, 더욱 더 그 사용이 확대되고 있다. 그러나 이와 같은 「-的」에는, 특정한 자명사와 대부분의 형용동사 어간을 그 어기(語基)로서 허용하지 않는, 일종의 어기제약(語基制約)이 존재한다. 저자는 졸고(2009)에서 「-的」의 용법의 변천을 통시적으로 고찰하여 「-的」의 기원 및 수용 그리고 의미기능(意味機能)에 관해서 고찰했다. 본 논문에서는 선행연구를 토대로, 그 중에서도 형용동사의 어간을 그 어기로서 허용하는 일부 「-的」의 실제용법에 대한 고찰을 통해 「-的」의 어기제약에 관해 검증했다.

그 결과 「-的」은 형용동사 중에서도 보다 명사에 가까운 형용동사를 어기로 채용한다는 것을 알게 되었다. 그러나, 이것은 절대적인 기준이 아닌 하나의 경향으로, 현대 일본어의 「-的」에는 어기제약의 규칙과 관계없이 관용적으로 형용동사의 어간을 어기로 사용하는 구용법(旧用法)도 함께 공존하고 있다는 것을 알 수 있다.

■ 김유영(金嘯泳)

오사카대학 박사후기과정
yuiyu1004@gmail.com

- 投稿日 : 2009년 11월 30일
- 審査開始 : 2010년 2월 2일
- 審査完了 : 2010년 2월 22일
- 掲載確定 : 2010년 3월 4일